

# 新明解 古語辭典

第二版

監 修 金田一京助

編者代表 金田一春彦

# 新明解 古語辭典

第二版

監 修 金田一 京助

編者代表 金田一 春彦

三省堂

## 明解古語辞典の歴史

昭和 28 年 4 月 15 日	明解古語辞典	初版発行
昭和 33 年 11 月 5 日	明解古語辞典	改訂版発行
昭和 37 年 10 月 1 日	明解古語辞典	新版発行
昭和 42 年 11 月 1 日	明解古語辞典	修訂新装版発行
~~~~~		
昭和 47 年 12 月 15 日	新明解古語辞典	初版発行
昭和 52 年 12 月 1 日	新明解古語辞典	第二版発行



## 新明解古語辞典 第二版

定価 一、六〇〇円

昭和五十四年一月十日 第六刷発行

編者 金田一 春彦（きんだいち・はるひこ）

三省堂編修所

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 株式会社 三省堂 八王子工場

発行所 株式会社 三省堂

〒102 東京都千代田区神田神保町一の一

電話 東京(03) 二九二四四(代) / 振替口座 東京六五四三〇

商標登録番号 元三五四・三七九四

<2 版新明解古語・1,344 pp.>

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

## 序

姉辞書『明解国語辞典』が装を新たににして『新明解国語辞典』として脚光を浴びたのに従い、妹辞書『明解古語辞典』も『新明解古語辞典』としてお目見えすることを、産みの親として嬉しくまたおもはゆく思う。

『明解古語辞典』がこの世に呱呱の声を挙げたのは昭和二十八年で、その後、行き届かなかったところを三十七年に改訂して『明解古語辞典 新版』の名で世に送った。今度の版は、生を受けてから二十年、まことに娘盛りになったわが子を送り出す母親の心境である。長いことひいきにして御愛用くださった方々にその成長ぶりを見ていただきたいとともに、ここに至る間にたえず有益な御忠言・親身の御叱正をくださった各位に厚く御礼申し上げます。

この辞書はもともと専門の学者を相手としたものではなかった。古典を勉強する高校以上の学生諸君や、古典に親しもうとする一般社会人の方々に、利用・活用していただくための辞書として誕生した。今度はその個性を一層はつきり打ち出してみた。用例を広く高校以上の古典の教科書から集めたこと、また名歌・名句と言われる作品は、その全体の解釈をもそえたこと、語釈は今まで以上に現代向きに、平易にと改めたことなど、それである。もちろん、学界での研究の進展とともに新しい解釈・訓み方が定説となったもの、用例にあげた本文が訂正されたものは、すべて取り入れる労を厭わなかった。

今度の全面改訂に当たっては、平安朝の語彙については、その方面の解釈の第一人者、石川徹氏に重要語はすべて改めて稿を起こしていただいたことを特記する。また、上代語は、新たに委員として西宮一民氏の参加を得たのは幸せだった。辻村敏樹・永野賢・秋永一枝三氏の協力は従前どおりである。なお、基本的な語彙については、特に高校古典教育に詳しい堀内武雄氏をわずらわして適切な表現に改めた。また、めんど

うな幹事の役は、今度は新進気鋭の関谷浩君が寢食を忘れてつとめてくれた。ここに感謝の意を表する。

最後に、辞書がいよ／＼出来上がるに当たり、三省堂の方々のお世話になることが大きかったことを銘記しておきたい。ことに、この前の『新版』の時もこの辞書を担当され、辞書作りにかけてはベテランである倉島節尚氏がその経験をフルに生かして辞書の出来上がりに尽力してくださったことは、永く忘れまい。

巻頭に掲げた見事な色刷りの口絵は、その語句の理解に絶好のものと思うが、編修に関係された多くの方々  
の苦心の配慮になるもので、私にとっては、成人式に臨む娘のお祝いに豪華な晴着を贈られたような思いがする。

昭和四十七年十二月

編者代表 金田一 春彦

## 第二版序

新明解版を世に送ってから五年、教育界・学界の進歩に応じて、この辞書も多少の改訂を施さざるを得なくなった。今回の改訂は、本文では、基本語の解説の整備、重要語彙の指示、参考事項の注記などが主で、付録では「枕詞一覽」「掛け詞一覽」の新設、「用例出典一覽」「古典文法事項一覽」の充実が主なものであるが、全般に亘り、新しい学説の尊重すべきものを大幅に取り入れた。意のあるところを汲まれ、活用していただくことを願う。今度の改訂に当たっては、辻村・西宮・秋永の三委員のお力にすぎることが大きく、また幹事を設けることをしなかつたので、その分三省堂編修所の倉島節尚氏に勞力奉仕を強いた。ここに慎んで感謝の意を表する。

昭和五二年一〇月一日

編者代表 金田一 春彦

## この辞典を使う人のために

## 総記

一、この辞典は、日本の古典をひもとく人人に、手軽に活用していただくように編集したものである。

二、本文に収めたところは、だいたい次のような語、約四万二千である。

(1) 古典に用いられて現代では用いられなくなった語、耳遠くなった語。

(2) 現代でも用いられているが、古典では違った意義に用いられる語。

(3) 古典に用いられる重要な慣用句・ことわざ・枕詞まくらことばの類。

(4) 古典にあらわれる重要な地名・歌枕の類。

(5) 文化史用語・文学史用語のような、古典を読む場合に特に心得ておくことが望ましい語。

(6) 助詞・助動詞・接辞・造語形の類。

三、いちいちの語の解説・記述は、原則として次のような形式・順序に従い、必要に応じて挿し絵を補った。

(1) 見出し (2) 漢字表記 (3) 発音  
 (4) 文法的性格 (5) 語源・語史 (6) 語義  
 (7) 用例 (8) 参考記事

四、巻頭には「襲よぎの色目」「服飾」「武具」「建築」「楽器」その他を色刷り掲げ、巻末には「古典語解釈のしおり」「読解用語

便覧」「用例出典一覧」「主要古典文法事項一覧」「枕詞まくらことば一覧」「主要年中行事一覧表」「官職表」「日本文化史年表」「漢字の読み方一覧」「歴史のかなづかい一覧」その他を付録として添え、古典語の読解にいつそう便利であるよう配慮した。

## 本文の解説

## 一 見出し

## 1 表記法

(1) 和語・漢語・梵語ぼんごはひらがなゴシック体で、いわゆる外来語はカタカナゴシック体で示した。

(2) 歴史のかなづかいによった。ただし、拗音ようおん・促音は小字右寄せで示した。

(イ) 外来語の長音は「ー」で示した。

○江戸時代の文献などには、いわゆる歴史的かなづかいと異なる表記が見られるが、これらも歴史的かなづかいに統一した。

○諸学者の研究により、従来のかなづかいのまちがいが明らかにあったものがあるが、この辞典ではそれらの研究の成果を取り入れたものがいくつかある。たとえば、「ずる(水・出・垂・衰・粹・推・酔・翠)」の類は「ずい」に、「つめ(対・追・鏡)」の類は「ついに」、「るゑ(累・誅・類)」の類は「るい」に統一した。その他「おう(翁)」「かう(講)」「がう(隆)」「ほう(宝)」「もう(毛)」などのように統一した。

○後世おのち撥音はつおんに転じた音節は「ん」と表記した。ただし、奈良時代ののみ口語として使われたものは、「かむかせ」のように「む」と表記し、同じく△印をつけて示した。

\*印をつけて示した。なお、「法」は仏教用語に限り「ほふ」に統一し、同じく△印をつけて示した。

○後世おのち撥音はつおんに転じた音節は「ん」と表記した。ただし、奈良時代ののみ口語として使われたものは、「かむかせ」のように「む」と表記し、「む」「けむ」「らむ」「なむ」の類は、「む」および「ん」の

両様の見出しを出した。

- (ハ) 現代かなづかいと異なるため、検索しにくい字音がなづかいは、

じゅう【柔・蹂・獸】 ヽじゅう

じゅう【入・十・什・汁・澁】 ヽじふ

じゅう【中・住・重】 ヽぢゅう

のように示し、現代かなづかいから容易に検索できるようにした。

- (3) 複合語は、複合要素を適宜「・」で句切って示した。

○ただし、固有名詞の見出しには示さなかった。

- (4) 活用語は、原則として終止形をあげ、いわゆる語幹と語尾の間に「・」を入れた。ただし、

(イ) 形容動詞および漢字二字以上から成るサ行変格活用  
の漢語動詞は、紙面の関係上、語幹だけを示した。

(ロ) ある特定の活用形を見出し語とした場合は(一)の  
中にその活用形を明記した。この場合、語幹と活用語  
尾の間に「・」を入れなかった。

- (ハ) 形容詞のシク活用は「―し」までを語幹とした。

- (ニ) 接辞は、他の語に接する部分に「・」をつけて示した。

(6) 複合語・派生語のうち、最初の三音節またはそれ以上  
にあたる部分がすでに項目として立っている場合には、  
それと一致する部分の見出しがなを「―」で省略し、す  
でにある項目(『親項目』)に追い込んで掲げた(『子項目』)。

【例】 やまと【大和・倭】(名)……―うた【大和歌】(名)

○ただし、子項目を、省略体その他語構成の異なる親項目、および  
清濁など表記の少し異なる親項目の条に追い込む場合は、見出し  
がなを「―」で省略せず、もう一度全体を示した。

- (7) いわゆる慣用句・ことわざ・一部の枕詞まくらことばのような連語  
については、

(イ) 親項目を持つ連語は、見出しがなをつけず、親項目  
と一致する部分を「―」で省略し、漢字かなまじりの  
ゴシック体で示した。

【例】 いへ【家】(名)……―つ鳥図

○連語は、複合語と異なり、同語源ならば親項目の音節数に関係な  
く追い込んで掲げることを原則とした。

○漢字表記に制約があったり、清濁が異なったりする場合は「―」  
で省略せず、見出し全体をゴシック体で示した。

(ロ) 親項目を持たない連語は、その全部を見出しがなに  
よって示し、独立の項目とした。

【例】 いはせもはてす【言はせ】(連語)  
さらず(連語)

## 2 重要語の表示

古典の正しい読解のために最も重要な語約三二〇語、そ  
れに準ずる語約九九〇語を選び、前者には\*\*印、後者には  
\*印を、それぞれの見出しの上に付した。

重要語の選択に当たっては、次のような語を目標にした。

- (1) 語義が多岐に分かれ、古典解釈上注意を要するもの。  
(2) 多くの複合語を作るなど、基本語的性格の濃いもの。  
(3) 古典文学における使用頻度の高いもの。  
(4) 最近の高校古典教材に頻出するもの。

## 3 配列

(5) 古典全集などで解釈注が付されることの多いもの。

○他辞書の重要語表示をも参考にした。

語の配列は、見出し語のかなの五十音順によったが、見出し語が同じかなの場合には、次の原則に従った。

(1) 発音については

(イ) 清音・濁音・半濁音の順に並べた。

(ロ) 拗音おひゃんがなの「ゃ」「ゆ」「よ」は、いわゆる直音がな

の「や」「ゆ」「よ」よりあとに並べた。

(ハ) 促音がなの「っ」は、直音がなの「つ」よりあとに並べた。

(ニ) 外来語に現われる長音「ー」は、その発音を考え、それぞれア・イ・ウ・エ・オの次に並べた。

(2) 単語(感動詞・名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・

連体詞・接統詞・助詞・助動詞)・接辞(接頭語・助数詞・

接尾語)・造語形・連語の順に並べた。

○同音の名詞では、名詞・代名詞・数詞・形式名詞の順に並べた。

○同音の動詞では、動詞・補助動詞の順に、同音の形容詞では、形容詞・補助形容詞の順に並べた。

○同音の動詞では、自動詞・他動詞の順に、四段・上一段・下一段・上二段・下二段・変格活用の順に並べた。この場合「自動詞・他動詞」の順を、「四段・上一段・…」などの順より優先させた。

○語源の同じものは同一項に含め、語源順に並べた。

○品詞の区別などについては「四 文法的性格」を参照されたい。

(3) 同音・同品詞のときは、

(イ) 見出しがなと発音の同一のものを先に並べた。

(ロ) 和語・漢語・外来語の順に並べた。

(ハ) 語構成を考え、「ー」のないものを先に並べた。

○ただし、固有名詞は「ー」がなくとも、名詞のいちばん最後に並べた。

(ニ) 見出し漢字のないものを先に並べた。

(ホ) 見出し漢字の字数の少ないものから先に並べた。

(ヘ) 同字数のときは、画数の少ないものを先に並べた。

(4) 字音がな検索のため、ミシンケイで困んで示した現代かなづかいの見出しは、同じかなの最初に並べた。

(5) 子項目として追い込まれた連語・複合語は、連語・複合語の別なく五十音順に並べた。

○複合語の配列については「一 見出し 1 (6)」を参照されたい。

○連語の配列については「一 見出し 1 (7)」を参照されたい。

(6) 接辞はすべて独立見出しとし、これと同音・同語源の語が見出し語にあるときは、その語のすぐ次に接辞を並べた。

## 二 漢字表記

見出しがなの次に、その語に対して、古典では多くのよ  
うな漢字が当て用いられてきたかを、次の原則に従って示  
した。ただし、極端なあて字の類は示さなかった。

(1) 漢字の字体については

(イ) 当用漢字表にある漢字は新字体を用いた。ただし、  
当用漢字補正案による新字体は採用しなかった。

(ロ) 人名漢字表にある漢字は新字体を用いた。

(2) 漢字表記は【】で囲み、送りがなは、ひらがな・歴史的かなづかいで示した。



- (3) 古典に用いられた漢字表記が二種以上あるときは、原則として、語源に近いと見られるものから先に並べた。
- (4) 見出し語の二音節以上に当たたる部分が、ひらがなで書かれることが普通であるときは、語構成を考え、その部分を「ー」で示した。

〔例〕 さは・やか【爽ー】

- (5) 子項目としての連語は見出しがなをつけず、直接漢字かなまじりの表記をゴシック体で示した。必要に応じてその読みを（ ）あるいは（ ）内に歴史的かなづかいによって示した。また複合要素を「ー」で分けず、活用のあるものは「・」によって語幹と語尾の区別を示した。

### 三 発音

その語の発音が、見出しがなと一致しない場合には、その発音を漢字表記のあとに、次の原則に従って示した。ただし、ぢ(〔ジ〕)・づ(〔ズ〕)・ぢゃ(〔ジャ〕)・ぢゅ(〔ジュ〕)・ぢょ(〔ジョ〕)・ゐ(〔イ〕)・ゑ(〔エ〕)・を(〔オ〕)の発音は、いちいち示さなかった。

- (1) カタカナで表音式を用いた。
- (2) 特に発音を示す必要のない部分が二音節以上あるときは「ー」で示した。この「ー」は、見出しがなの「・」の切れに従うが、紙面の節約上、次のような特例を設けた。

〔例〕 だいじゃう・だいじん【太政大臣】利(シヨ) (名)

- (3) 親項目と重出する子項目の発音は示さなかった。

- (4) 親項目を持たない連語の発音も(1)(2)に従った。

〔例〕 ゑんちやう・こくい【円頂黒衣】利(シヨ) (連語)

### 四 文法的性格

- (5) 子項目としての連語の発音は示さなかった。

○時代によって発音の異なるものは、発音の位置に示さず、( )の中または参考欄に注記した。「五 語義 4」を参照されたい。

1 各語の文法的性格は、( )で囲み、次のように略語をもって示した。

#### (1) 品詞

(感)	感動詞	(名)	名詞
(代名)	代名詞	(数)	数詞
(形名)	形式名詞	(自動)	自動詞
(他動)	他動詞	(補助)	補助動詞
(形)	形容詞	(補形)	補助形容詞
(形動)	形容動詞	(副)	副詞
(連体)	連体詞	(接)	接統詞
(間助)	間投助詞	(終助)	終助詞
(係助)	係助詞	(副助)	副助詞
(格助)	格助詞	(接助)	接統助詞
(並助)	並立助詞	(助動)	助動詞
(接頭)	接頭語	(助数)	助数詞
(接尾)	接尾語	(造語形)	造語形成分
(連語)	連語		
(2) 活用			
(四)	四段活用	(上一)	上一段活用
(下一)	下一段活用	(上二)	上二段活用
(下二)	下二段活用		

- (ナ変) ナ行変格活用 (ラ変) ラ行変格活用  
 (サ変) サ行変格活用 (カ変) カ行変格活用  
 (ク) 形容詞のク活用 (シク) 形容詞のシク活用  
 (ナリ) 形容動詞のナリ活用  
 (タリ) 形容動詞のタリ活用  
 (特活) 助動詞の特殊活用

○助動詞・接尾語の活用は、動詞・形容詞に準じて、(助動下二) (接尾四) (接尾シク) のように示した。

○特定の活用形の例しか見えず、活用の種類を決められないものは、(自動連用) のように示した。

## 2

品詞の名目、活用形の種類などは、だいたい現行の検定教科書の用法に従った。ただし、次の点に注意されたい。

- (1) 名詞の中で、代名詞・数詞・形式名詞は特別に示した。動詞には、自動詞・他動詞の区別を示した。また、動詞では補助動詞、形容詞では補助形容詞を特別に示した。
- (2) 形容詞は、文語は(形ク)(形シク)とし、口語のみに使われるものは(形)とした。
- (3) 形容動詞は、(形動ナリ)(形動タリ)のように示した。連体形が「一な」という形のものには(形動ナリ)に入れた。口語のみに使われるものは(形動)とした。
- (4) 助詞は七つに分類し、語源に関係ない限り、間投助詞・終助詞・係助詞・副助詞・格助詞・接続助詞・並立助詞の順に示した。
- (5) 用言については、活用の種類を示した。

○活用の種類は古典本位にした。活用が時代とともに特殊な変化をしたものはその旨を注記した。

## 五 語義

- (7) 助動詞の活用は用言に準じて示した。なお、活用のわかりにくい助動詞には「一」内に全活用形を示した。
- (8) 漢字かなまじりのゴシック体で示した子項目としての連語には、文法的性格を示さなかった。

○ただし、かな書きだけの連語の子項目には(連語)と示した。

## 2

- 1 語義の解説は、原則として次の順序によって行なった。
- (1) 語源・語史 (2) 位相 (3) 説明
- (4) 現代語訳 (5) 補助的解説

## 2 表記法

- (1) 漢字ひらがなまじり文で示し、当用漢字・現代かなづかい・新送りがなによった。漢字については「二漢字表記(1)」に準じた。

- (2) 当用漢字以外の漢字を用いるときには、下に( )で囲んでその読みを示した。また、当用漢字でも、音訓表にない読み方や誤読される恐れのあるものには読みを示した。ただし、次のような場合には、原則として当用漢字外の漢字でも読みを示さなかった。

- (イ) 見出し語の漢字表記や解説など、同一項目内ですでにその漢字が使われ読みが示されている場合。

- (ロ) 地名・人名・時代名や、「歌舞伎」「浄瑠璃」「三味線」などのような、古典を読む場合常識となっている語。解説文中に古語を用いて説明するときは、次のように示した。

- (3) 解説文中に古語を用いて説明するときは、次のように示した。

(イ) その項目を参照した方がわかりやすいようなことには「」をつけた。

(ロ) 漢字の読みは原則として(へ)で囲んで示した。現代かなづかいと異なる歴史的かなづかいで示した読みは(へ)で囲んだ。

(4) 解説文中の次に当たるものは、他の語と紛れぬように、原則としてカタカナで示した。

(イ) 外来語・動植物名・人体部分名・食物名・擬声擬態語・はなはだしい俗語・方言・神話中の固有名詞、その他当用漢字にない字や一般にカタカナで書かれることが多いもの。

〔例〕 い(名) クモの糸。クモの巣。

(ロ) それが現代語訳であることを特に強調したい場合。

〔例〕 あり・く(歩く)(自動四) ①今の、アルク。

3 語義がいくつあるときは、原則として語源に近いものから ①…… ②…… ③…… として順に並べた。また、同じ語源であっても、当てられる漢字が違う場合や、品詞の種類が違う場合には、大きく、①…… ②…… と分けたこともある。また、必要に応じて ①②…… の中を、さらに小さく ①(イ)…… (ロ)…… のように分けた。

4 その条の見出し語についての語源的・語史的説明は(へ)で囲んで示した。

○その語の発音の歴史も(へ)の中に示した場合もある。

〔例〕 ていけ(天気)(名) (「てんけ」の撥音「ん」を「い」と表記したものという)

もみぢ【紅葉・黄葉】(名) (上代は「もみち」。「もみつ」の連用形から)

しゃうくわん【賞翫】(名・他動サ変) (後世は「しゃうぐわん」)

5 各語の位相は必要に応じて、上代東国方言・仏語(仏教語)の略)・歌舞伎用語・女房詞・遊里語などのように注記した。また、枕詞には(囿、ことわざ)には(囿)とつけた。

○なお、枕詞については付録「枕詞一覽」を参照されたい。

6 説明・訳語をしるすに当たっては、

(1) 最近の学説を広く参照してその成果を取り入れ、いっそう正しく古典を読解するように努めた。

(2) なるべく平易な語を用い、語義が現代人に明確に伝わるよう苦心した。そのためには、特に次のような配慮を行なった。

(イ) 多少俗語がかつた語でも、意義の解明に便利なものは、積極的に訳語として採用した。

(ロ) われわれの目に親しく触れるものに類似のものがあれば、極力それとの対比を試みた。

(ハ) 解説にわかりにくい語が出て来た場合には、ギョウウジャンニク(草ノ名)のように注記をし、理解の助けとした。

7 補助的解説には、次のようなものがある。

(1) 語義の解説のあとに、その見出し語の略語・同義語を

「」、「」の形で、また、その対語を「」、「」の形で示した。

## 六 用 例

(2) 「何何」の項を参照せよという意味を、左の形で示した。

↓「」 ……なるべく参照してほしい場合

⇩「」 ……必ず参照してほしい場合

○なお、①②……①②……などと分けて解説されていて、その二つ以上にかかるときは、▽をつけていちばん最後に置いた。

(3) 俳諧はいかいで季語として用いられる語については、その語の表わす季節がわかりにくい場合に限り、たとえば(季・春)のような形で示した。

○なお、季語については付録「季語一覧表」を参照されたい。

1 用例は次のようなめやすを設けてとった。

(1) 人人に広く親しまれているもの。

(2) 前後の文脈がわかりやすく、かつ、短く句切れるもの。

(3) 時代のなるべく古いもの、口頭語として生きて使われていた時代のもの。

2 用例の表記は、原典の形を改めて、現行流布の漢字ひらがなまじり文とした。この場合、漢字については「二漢字表記(1)」に準じた。

また、かなの部分かなは歴史的かなづかいに統一した。

○歴史的かなづかいの表記は、「一 見出し 1 (2) のかなづかいの解説に準じる。なお、後世撥音で発音される音節については、平安時代以前の文献によるものは「む」と表記し、鎌倉時代以後の文献によるものは「ん」と表記した。

(1) 引用文は「」で囲み、その出典は「」で囲んで示した。

(2) 見出し語に当たる部分は「」で示し、それが活用語のときは、語幹を「」で示し、活用語尾は「・」で区切ってその下に示した。

○活用語で、終止形以外のある特定の活用形を見出し語とした場合は「」だけで示し、「・」で活用語尾を区切ることをしなかった。

○「す」「く」「みる」などの活用形で、語幹と活用語尾との区別ができないものは、そのまま示し、見出し語に当たる部分に傍線を施した。

(3) 見出し語と形の異なるものは、「」を用いず全部書いた。

○見出し語と、心中思惟しゆいの内容を表わす場合には『』で囲んで示した。ただし、引用文全部がひとりのことばのときは「」を用いた。

(4) 中略を示す場合は、⋮を用いた。上略・下略は特に示さなかったが、必要な場合には同様にならう。

(5) 用例中の読みは歴史的かなづかいで示した。ただし、当用漢字外でも読みを省略したものがある。

3 わかりにくい用例文については、次のような形で補説・注釈や、漢字の読みを示した。

(1) 「(ドンナ願イ事デモ) 頼朝が一期の間はかなへん」のように文脈を補説した。

(2) 「頼朝が一期の間は(生キテイル限リハ)かなへん」のように( )で注釈をつけた。

(3) 「頼朝が一期(やち)の間(あひ)はかなへん」のように、漢字の読みをひらがな歴史的かなづかいによって示した。

(4) 著名な和歌・俳句には全釈を施した。

## 4 出 典

出典は主として略称により、次の方針に従って示した。

詳しくは、付録「用例出典一覧」を参照されたい。

(1) 室町時代以前の作品

(イ) おもな物語・説話集・随筆の類で、巻に分かれるものは巻数(巻名)を、段に分かれるものは段数(章段名)を書名の下に示した。また、作品によってはその両方を示した。なお、「枕草子」は段数と冒頭の句を示した。

〔例〕〔記・上〕

〔源・桐壺〕

〔伊勢・三〕

〔平家一祇王〕

〔太平35新將軍〕

〔今昔4一六〕

〔宇治拾遺15一九〕

〔枕・丸・五月の御精進〕

○巻およびそれに準ずるものの数字は算用数字、段は平活字を用いた。

(ロ) 記述が年代を追っているものは、年号を示した。

〔例〕〔東鑑・文治2〕

〔御湯殿上・文明9〕

(ハ) 歌集のうち、勅撰集および「金槐和歌集」「山家集」には部立てを、「万葉集」には巻数を示した。また、特に「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」には「国歌大観」の番号をつけた。

〔例〕〔後撰・春上〕

〔金槐・秋〕

〔万5八六〕

〔古今・春下・八四〕

(ニ) 謡曲・狂言・幸若舞には曲名、御伽草子には作品名を示した。

〔例〕〔謡・安宅〕

〔狂・末広がり〕

〔幸若・高館〕

〔御伽・鉢かづき〕

(2) 江戸時代以降の散文・芸能は、作者名(またはジャンル)と作品名(あるものは巻・段まで)を示し、和歌・

狂歌・川柳は収載書名を、俳句は作者名のみをしるした。

〔例〕〔宣長・玉かつま〕〔西鶴・一代男3〕

〔三馬・浮世風呂2上〕

〔浮世・三代男〕〔浄・先代萩〕

〔賀茂翁歌集〕

〔柳樽〕

〔芭蕉〕

(3) 語義の説明に直接利用した出典の名は『』で囲んで示した。

〔例〕〔和名抄〕

〔守貞・漫稿〕

〔俚言集覽〕

## 七 参考欄

古典語をより深く理解するために役立つ解説を、〔参〕として必要とする項の末尾に掲げた。そのおもな内容は次のようなものである。

- (1) 語源・語史的な解説
- (2) 類義語との対比
- (3) 発音の変遷
- (4) 文法上の問題点
- (5) 考慮すべき異説
- (6) 文学的用法
- (7) 日常的背景

## 八 挿し絵

ことばでは意を尽くしがたいものについての補助的説明として、必要とする項に掲げた。

## 九 色刷り付図

色彩が重要な要素になるものや、個々の項目に掲げるよりは、一括して示し相互に対比させる方が効果的であると考えられるものをまとめ、付図として巻頭に掲げた。









